

「今は神の民」
ペトロの手紙一 2章 1-10節

1920年頃、インドで「狼に育てられた少女」が発見されたという記録があります。彼女たちが人間らしさを取り戻し始めたきっかけは、他者の言葉を理解しようとし、自らも意思を伝えようとする「言葉の交わり」が始まった時であったと伝えられています。このエピソードは、人間が単に人の姿で生まれたから「人」になるのではなく、誰かとの言葉の交わり、関係性の中でこそ人間として形づくられていくことを示唆しています。私たちはどのような言葉を受けて育ってきたでしょうか。温かい言葉でしょうか、それとも冷たい言葉でしょうか。クリスチャンを「神の子」として形づくり、育ててくれるのは、移ろいやすい「人の言葉」ではなく、永遠に変わることはない「神の言葉」です。聖書は、私たちが朽ちない種である神の生きた言葉によって新しく生まれたことを教えています。

新しく生まれた者が神の民として成長するために、ペトロは二つのことを勧めています。第一は、悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口といった、人間の古い言葉から生まれる罪を「捨て去る」ことです。なぜなら、それらは、もはや今の私たちの言葉ではないからです。私たちは、すでに新しくされた者だからです。古い言葉に支配される生き方ではなく、神の言葉によって新しい命に生きる者とされているからです。第二は、「霊の乳」である神の言葉を、乳飲み子のように慕い求めることです。赤ちゃんにとってお乳が命そのものであるように、御言葉は信仰者の命の糧です。御言葉を聞き、受け取り続けることで、私たちの骨格が作られ、神の子としての人格の土台が整えられていきます。この歩みは義務感による努力ではなく、「主が恵み深い方だということを知った」という喜びから湧き上がる応答なのです。

ところで、私たちは、一人で信仰に生きるものではありません。救いとは、神と私の一対一の関係だけで完結するものではありません。ペトロは、私たちが「生きた石」として用いられ、一つの「霊的な家（教会）」へと建て上げられるようにと促します。この家の「かなめ石」はイエス・キリストです。私たちはこのキリストを中心に、一人ひとりが無くてはならない「生きた石」として組み合わされています。石の形、色、大きさはさまざまで、時にかみ合わない痛みを感じることもあるかもしれませんが、しかし、不揃いな石同士が隣り合い、組み合わされることで、一人では決して造れない頑丈で美しい「神の家」が完成していくのです。

かつての私たちは、神を知らず、自分の力だけで生きようとする的外れな生き方をしていました。それは「死んだ石」のような存在でした。しかし今は、神の圧倒的な憐れみによって、価値ある「生きた石」、すなわち「神の民」とされました。この新しい身分には、「王の系統を引く祭司」という特別な務めが伴います。祭司とは、神と人との間に立って執り成し、両者をつなぐ役割を担う者です。これは特定の誰かではなく、救いにあずかった私たち一人ひとりに委ねられているのです。私たちは、自分を暗闇から驚くべき光の中へと招き入れてくださった神の力ある業を、言葉と生き方をもって広く伝えるために選ばれました。「かつては神の民ではなかったが、今は神の民」とされた恵みを覚え、御言葉に養われ、共に教会を建て上げながら、神の祝福を世に宣べ伝えてまいりたいと願います。